

立命館大学大学院
2017年度実施 入学試験
博士課程前期課程

文学研究科

人文学専攻・日本史学専修

※2017年9月入学 入学試験は、筆記試験の実施がないため掲載していません

入試方式	実施月	コース	科目					
			専門科目 (英語による問題を含む)		外国語(英語)			
			ページ	備考	ページ	備考		
一般入学試験	9月	研究一貫	P.1~		P.6~			
	2月		P.7~		P.12			
	9月	高度専門	P.1~		/			
	2月		P.7~					
社会人入学試験	9月	研究一貫	x				/	
	2月		x					
	9月	高度専門			/			
	2月							
外国人留学生 入学試験	9月	研究一貫					/	
	2月							
	2月 (2018年9月入学)							
	9月	高度専門			/			
	2月							
	2月 (2018年9月入学)							
学内進学 入学試験	9月	研究一貫					/	
	2月							
	9月	高度専門						
	2月							
学内 (進学プログラム履修者) 入学試験	9月	研究一貫			/			
	2月							
	9月	高度専門					/	
	2月							
APU特別受入 入学試験	9月	研究一貫			/			
	2月							
	2月 (2018年9月入学)							
	9月	高度専門					/	
	2月							
	2月 (2018年9月入学)							

立命館大学大学院
2017年度実施 入学試験

博士課程後期課程

文学研究科

人文学専攻・日本史学専修

※2017年9月入学 入学試験は、筆記試験の実施がないため掲載していません

入試方式	実施月	科目	ページ	備考
一般入学試験	2月	英語	P.13	WEB非公開
外国人留学生 入学試験	9月			
	2月			
	2月 (2018年9月入学)			
学内進学 入学試験	2月			
	2月 (2018年9月入学)			

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏名
人文学専攻 (日本史学専修)	前期課程	専門科目	<input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度専門		

問一 次の五題のうちから一題を選んで論述せよ。

- (一) 弘仁・貞観文化の特質について、具体例を挙げながら論ぜよ。
- (二) 日本中世社会と身分制というテーマで、自由に、かつ具体的に論ぜよ。
- (三) 日本中世の公武関係について、鎌倉時代と室町時代を比較しながら論述せよ。
- (四) 徳川幕藩体制の特質を、朝鮮王朝（朝鮮）・明清王朝（中国）と比較して説明せよ。
- (五) 近現代日本における天皇の政治的機能について、重要と思われる点を自由に論ぜよ。

問二 次の六項目の中から四項目を選び、その語句をそれぞれ二～五行程度で説明せよ。

- (一) 封蔵本備
- (二) 当知行安堵
- (三) 五山文学
- (四) 徳川家治
- (五) 軍部大臣現役武官制
- (六) 日韓基本条約

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名 人文学専攻 (日本史学専修)	課程 前期課程	科目 専門科目	コース <input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度専門	受験番号	氏名
-----------------------------	------------	------------	---	------	----

問三 次の問題(一)～(四)のうちから、二つ選んで解答せよ。

(一) 次の史料を書き下し文に改め、かつ解説せよ。

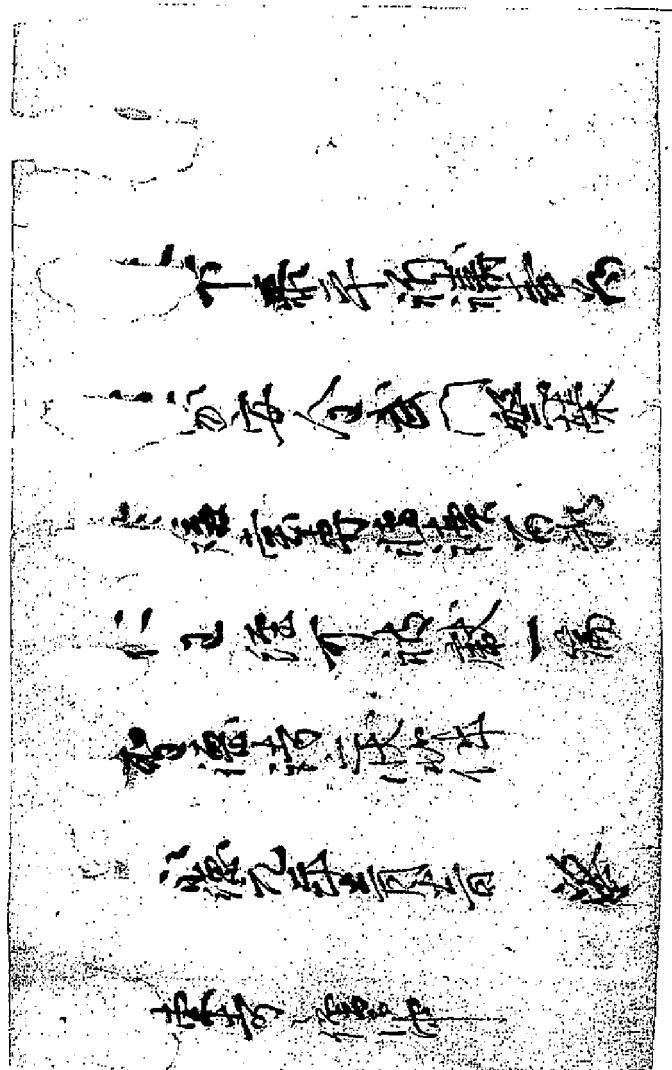
下野国言造栗師寺別当道鏡死道鏡俗姓弓削連河内人也略涉英文以禪行聞由是入内道場列为
 禪師宝字五年從幸保良時侍看病稍被寵幸廢帝常以為言與天皇不相中得天皇乃遷平城別宮而
 居焉宝字八年大師意美仲麻呂謀反伏誅以道鏡為太政大臣禪師居頃之崇以法王載以鸞輿衣服
 飲食一擬供御政之巨細莫不取決其弟淨人且布衣八年中至從二位大納言一門五位者男女十人
 時大宰主神習且阿曾麻呂詐稱八幡神教誑羅道鏡々々信之有覬覦神器之意詎在高野天皇紀泪
 于宮車晏駕猶以威福由己竊懷僥倖御葬礼畢奉守山陵以先帝所寵不忍致法因為造下野国栗師
 寺別当遷送之死以庶人葬之

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏名
人文学専攻 (日本史学専修)	前期課程	専門科目	<input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度専門		

(二) 次に示す図版（古文書）のことに關する(一)～(四)の設問に答えよ。

- (1) この文書の紙文を作れ。改行は原文とおりに行い、送り点・読点を付し、異体字・正字（旧漢字）は対応する常用漢字（新字）があれば、その類に改めよ。
 - (2) この文書にもっとも適切な文書名を付けよ。なお、この文書の年代の西暦は一三八一年である。
 - (3) この文書の花押は、それまで墨判者が用いた花押とは異なる形のものとして早い事例である。この人物の花押の変化について、古文書学的な見地を含めながら知るところを述べよ。
 - (4) この文書の一行目から三行目の最初の文字は欠損している。このように、文字の欠損がある場合、その部分の文字を比定する上で試みるべき作業について述べよ。
- (出典：『東寺百合文書WEB <http://hyakugo.kyoto.jp/contents/detail.php?id=28536>]



文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏名
人文学専攻 (日本史学専修)	前期課程	専門科目	<input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度専門		

(三) 次の漢文を読み下し文にせよ。(出典 荻生徂徠『弁道』)

道難知亦難言。為其大故也。後世儒者。各道所見。皆一端也。

夫道。先王之道也。思孟而後。降為儒家者流。乃始与百家爭衡。可謂能自小己。觀夫子思作中庸。与老氏抗者也。老氏謂聖人之道偽矣。故率性之謂道。以明吾道之非偽。是以其言終歸於誠焉。中庸者。德行之名也。故曰扱。子思借以明道。而斥老氏之非中庸。後世遂以中庸之道者誤矣。古之時。作者之謂聖。而孔子非作者。故以至誠為聖人之德。而又有三重之說。主意所在。為孔子解嘲者可見焉。然誠者。聖人之一德。豈足以尽之哉。

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名 人文学専攻 (日本史学専修)	課程 前期課程	科目 専門科目	コース <input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度専門	受験番号	氏名
-----------------------------	------------	------------	---	------	----

(四) 次の書簡①②を読み、後の問いに答えよ。

① 謹啓 時事新報記者に相談之処大に驚きたるは小村外相より自分之口より洩れたと云はれては困るなれ共此同盟には伊藤侯は何等之關係なし。日露同盟を締結せんとせし伊侯には氣之毒千萬なれ共現内閣は今回日英同盟を締結せり云々と申されたる由。此語を直接に聞きたる矢先に伊侯が十二分に日英同盟に關係斡旋せし〔挿入「て」〕は小村氏に対して一寸書けざれば何んとか明朝の紙上に掲載すべく尚政友会が日英同盟に満腔の同情を表することは掲載すべしと回記者申し候。同志の新聞は明朝掲載可致候。尚地方各新聞へは唯今函書にて郵送致候。更に外国人に対しては明朝のジャパン・タイムス紙上に於て表明致候。拜具
二月十五日夕 志賀重昂
西園寺侯爵閣下

② 肅啓 余泰前總ノ候御清様奉大慶候。昨午後志賀氏ヨリ尊示伝承仕り候。日英同盟發表ノ当日ヨリシテ国民新聞ハ此事ノ〔挿入「伊藤」〕内閣時代ニ始まりタルコトヲ明言シ、且つ伊藤侯ノ戦力と参画ノ力少カナ〔ママ「ナカ」〕ヲカルコトヲ諷示仕置き候次第ニ御座候。但た政友会連中ノ聊か立後れノ氣味あり。〔挿入「政友会中ニモ」〕議員折ノ味者ハ自から〔「自から」に傍点〕日英同盟を以テ政友会ノ大打撃坏と自から〔「自から」に傍点〕言説スル徒あり。甚だ馬鹿申して相弁英ハ紙上ニ於て逐ニ彼等ノ出路ヲ指占仕リタル次第ニ御座候。此レハ尊應ヲ予想シテ中八九ハ此ノ如しと〔抹消「確信」〕推定シタル次第ニ御座候。志賀氏ノ來話ニテ愈々其ノ予想ノ違ハサリシヲ確め大慶不過之と奉存候。万事御重論ノ通りニテ其ノ調子ヲ取り外さぬ積りニ御座候間乍奈事御放念奉願上候。勿々頓首
二月十五朝 徳富猪一郎
西園寺侯爵閣下

問1 この二つの書簡は共に同じ日(明治三五年)に書かれたものである。志賀と徳富の二人は西園寺公望に何を伝えようとしたのか、箇条書きで答えよ。

問2 こうした書簡が書かれた背景について、考えられることを述べよ。

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏名
人文学専攻 (日本史学専修)	前期課程	外国語 (英語)	研究一貫		

次の英文を和訳せよ。

The aftermath of the Tōhoku disaster, arriving after twenty years of stagnation, left Japan in an impossible situation. It certainly crippled the incumbent government, a short-lived showing by the opposition, which was forced to introduce further austerity measures and lost power, once again, to the Liberal Democratic Party. It shut down a proposed initiative to bring jobs to the north by moving certain industries out of the southern plains. It increased consumption taxes even further, and plunged the Japanese into an unwinnable debate about energy sources—should they back oil, which would drag them into global politics, or nuclear power, which would risk decimating another swathe of Japan?

The new prime minister, Kishi Nobusuke's grandson Abe Shinzō, won the 2020 Olympics for Tōkyō, at least giving him some hope of investment and tourism, but his main hopes were pinned upon his “three arrows” of fiscal stimulus, monetary easing, and structural reforms. These buzzwords seem intended more to justify the “three arrows” part—a reference to a samurai parable in which a single arrow might be broken in two, but three grasped together are far stronger. In fact, Abenomics, as it was soon called, was a lifeboat made of patches and bailouts, in which the yen was devalued but Japanese workers continued to pay consumption tax for anything they bought with their dwindling salaries. Meanwhile, Abe's government drifted inexorably to the right, saber-rattling over tiny strategic islands in the South China Sea and infringing on press freedoms.

Japan's trade deficit continued to rise—not least because the shutdown of the nuclear power stations returned the country to its economically dangerous reliance on imported fossil fuels. As with many other aspects of modern Japanese politics, initiatives seemed to ignore the root causes of any problems, and instead made futile attempts to address their outward manifestations.

But the biggest problem Japan currently faces is demographic. As in many other postindustrial countries, the generation born in the 1960s is retiring, creating a “graying population” of pensioners supported by a declining workforce of taxpayers. Japanese policymakers speak hopefully of the infrastructure projects and reforms that were introduced as the Tōkyō Olympics approach in 2020, but also with mounting concern about the “2030 Problem,” when the retirement of the following generation will place an even heavier burden on the only children, the underpaid, the unemployed, and the unemployable of the next.

【出典】

Jonathan Clements, *A Brief History of Japan*, pp.260-261, © 2017 by Jonathan Clements.
Reproduced with permission of Tuttle Publishing.

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏名
人文学専攻 (日本史学専修)	前期課程	専門科目	<input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度専門		

問一 次の四題のうちから一題を選んで論述せよ。

- (一) 七〜九世紀の水上天皇と天皇の関係を廻る問題について、具体的な事例を挙げて論述せよ。
- (二) 治承寿永の内乱の特質について、具体的な事例を挙げて論述せよ。
- (三) 織豊政権の歴史的役割について、それぞれの違いに留意しながら自由に論述せよ。
- (四) 近現代日本における国民の政治参加について、重要と考える点を自由に論述せよ。

問二 次の七項目の中から四項目を選び、その語句をそれぞれ三〜五行で説明せよ。

- (一) 主計寮・主税寮
- (二) 安達養盛
- (三) 『政基公旅引付』
- (四) 通航一覽
- (五) 阿部正弘
- (六) コンドル
- (七) 博覧盛治

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏名
人文学専攻 (日本史学専修)	前期課程	専門科目	<input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度専門		

問三 次の問題（一）～（四）のうちから、二つ選んで解答せよ。

（一） 次の史料文を書き下し、かつ解釈せよ。

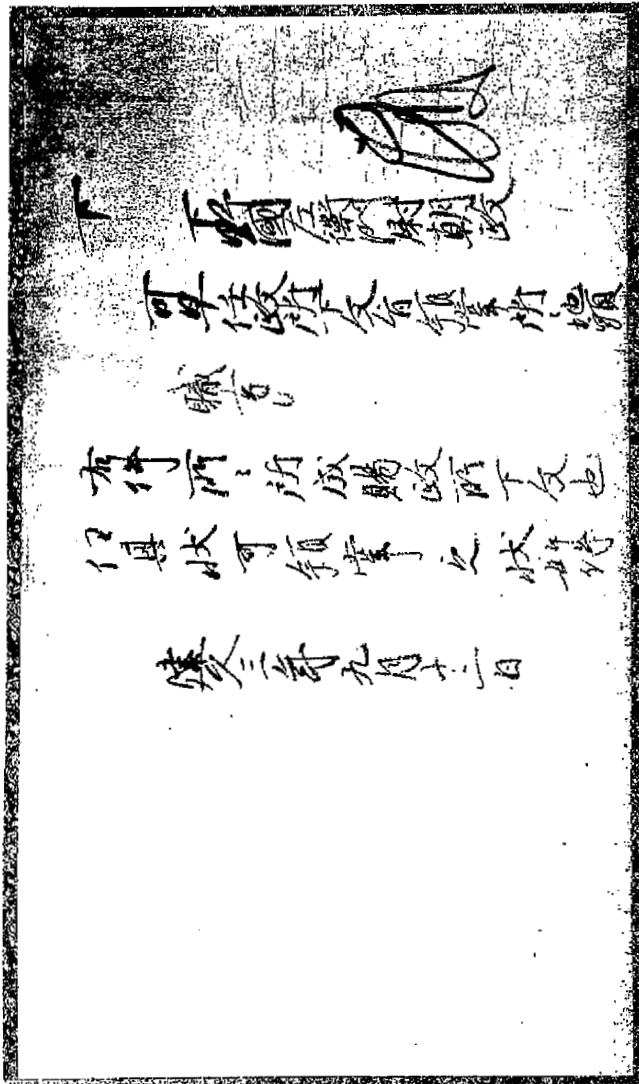
天平尙眞仁正皇太后崩姓藤原氏近江朝大織冠内大臣鎌足之孫平城朝贈正一位太政大臣不比等之女也母曰贈正一位良犬養橋宿称三千代皇太后幼而陰感早播声兼勝宝感神聖武皇帝備式之日納以為妃時年十六接引衆御皆悉其歡雅聞礼訓敦崇仏道神龜元年聖武皇帝即位授正一位為大夫人生高野天皇及皇太子其皇太子者誕而三月立為皇太子神龜五年天而薨獲時年二天平元年尊大夫人為皇后湯沐之外更加別封一千戸及高野天皇東宮封一千戸太后仁慈志在救物創建真大寺及天下國分寺若本太后之所勸也又設悲田施藥所院以療養天下飢病之徒也勝宝元年高野天皇愛禪故皇后宮職曰紫微中台抄選敷覽並列台司至乎二年上尊号曰天平尙眞仁正皇太后改中台曰坤宮官崩時春秋六十

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏名
人文学専攻 (日本史学専修)	前期課程	専門科目	<input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度専門		

(二) 次に示す図版(古文書)のコピーに関する(一)～(4)の設問に答えよ。

- (1) この文書の釈文を作れ。改行は原文どおりに行い、送り点・読点を付け、異体字・正字(旧漢字)は対応する常用漢字(新字)があれば、その類に改めよ。
 - (2) この文書にもっとも適切な文書名を付けよ。
 - (3) この文書の宛所と同一人物に対して、同日付で「政所下文」が出されている。この文書と「政所下文」について、古文書学的な見地から様式上の相違点を指摘せよ。
 - (4) この文書と「政所下文」の二つの文書が同時に出された背景について説明せよ。
- (出典：『企画展示 中世の古文書』国立歴史民俗博物館、二〇一三年、一四頁
源頼朝下文(一九二三年)(神奈川県立歴史博物館蔵)



文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏名
人文学専攻 (日本史学専修)	前期課程	専門科目	<input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度専門		

(三) 次の漢文を全文読み下し文にせよ。句点は適宜補ってある。

謂道春曰。道古今不行矣。故中庸。不可能也道其不行矣。夫卿以為如何。春※対曰。道可行矣。中庸所云者蓋孔子嘆時君之暗而道之不行而言者也。非道者実不可行者之謂也。六經所云此類不少。非独中庸耳。曰。中者何。中者難把。一尺之中非一丈之中。一屋之中非一家之中。一国之中非天下之中。物各其中。得其理者必中矣。故初学者欲知中則不知理必不得矣。是以中者理而已矣者古今之格言也。(中略) 暮府※又曰。湯武征伐權乎。春対曰。君好薬。請以薬喩。以温治寒以寒治熱而其疾已是常也。以熱治熱以寒治寒謂之反治。要之活人而已矣。是非常也。此先儒權譬也。湯武之拳不私天下唯在救民耳。暮府曰。非良医如反治何。只恐殺人耳。春対曰。然。上不桀紂下不湯武則弑逆之大罪天地不能容焉。世人以此為口実。所謂淫夫学柳下惠者也。唯天下人心歸而為君不歸而為一夫。(田典『羅山先生文集』卷三十二)。

※一 春一 林道春(羅山)のこと ※二 暮府一 徳川家康のこと

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏名
人文学専攻 (日本史学専修)	前期課程	専門科目	<input type="checkbox"/> 研究一貫 <input type="checkbox"/> 高度専門		

(四) 次の史料を読み、①～③の問いに答えよ。

二 明治(19)年8月1日

拝啓 陳は三浦、曾我岡將許表差出候趣、何共彼等之為に相惜しむ候事に御坐候。謹而奉命速に其任に就候而こそ軍人之本分と存候。又桂等之方は此際揚々得意之姿に可有之被察候。是も兎角は御入れ番に而も相成不申而はやかまは相絶申間布事と奉存候。代りは滋野なれば公平に可有之、事務も十分処弁可致相考申候。○近來独之國より御雇之者と公國より御雇之ものとの間自然鬚を突く様之勢に有之、終に其末公使に及び候而つまらぬ事に猜疑を生し、御交際上にも幾分弊影響を来し候様可相成に付、其辺陸軍大臣へ十分注意相成候様之御氣付共有之候而は如何哉と愚考仕候。三浦等の辭表は邪推かは不知候へ共、所謂困ませ手段位之事に可有之、断然御聞届相成候得は却而本人も愕然可仕、軍人懲戒之為に可宜候得共、まさかそふも参り申間布に付、精々療養候様との御次沙に而再三に及候は、詰まり泣憂入りに至り可申、決而覚を結候共恐るゝに足候程の事に無之と奉存候。鄙見を不願申上候。御取舎奉願候。頓首

八月一日

光 願

春敵相公陛下

- ① 傍線部①をすべてひらがなに直せ。
- ② この史料は、明治一九年に陸軍内で発生したある対立について書かれたものである。筆者(田中光願)はこの対立についてどのように考えているのか。箇条書きで整理せよ。
- ③ 宛名の「春敵相公」は誰か。

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏名
人文学専攻 (日本史学専修)	前期課程	外国語 (英語)	研究一貫		

次の英文を和訳せよ。

It is no easy task to convey a convincing picture of the spiritual atmosphere that surrounded those who devoted themselves to the study of *Japanese* thought in those days of the so-called dark valley of Japanese history. It is even difficult to convey it to the younger generation brought up in postwar Japan, let alone to the Western reader from a quite different cultural environment. It is not enough simply to express abstractly things that everyone knows—the severity of government censorship or the taboos surrounding such concepts as “the national polity.” Perhaps the best way to give the reader a feeling for the mental climate in which Japanese intellectuals lived in the thirties and early forties—including the inhabitants of ivory towers—is to recount one or two episodes that occurred at the time I was writing these essays.

The essay that makes up Part I of this book appeared in four successive numbers of the *Kokka Gakkai Zasshi* between January and April 1940. When the first one came out I soon became aware of a grave misprint. In discussing the arrival of Confucianism to Japan (see p. 7 below) I referred to Emperor Ōjin's reign. But for *jīn* the character 仁 (benevolence) was used instead of 神 (god). The late Professor Muraoka Tsunetsugu (1884–1946) who was lecturing on Japanese thought at both Tokyo and Tōhoku Imperial Universities made a point of coming round to my room at the university to advise me to put an immediate correction in the next issue. He told me then that Dr. Inoue Tetsujirō (1854–1944) had once made exactly the same mistake² and had been fiercely attacked for it by right-wing nationalists. “A nice irony, when you come to think of it,” he added, “Dr. Inoue who had long been famous for attacking other scholars and men of religion like Uchimura Kanzō [1861–1930], accusing them of harboring ideas and theories contrary to the national polity, and there was the same Inoue, being accused of *lèse majesté* for a simple slip.” At any rate, in Imperial Japan, there was no question about it: to get the name of any one of Japan's long succession of Emperors wrong was not a matter that could be simply excused as a mere printing error or slip of the pen. I put an errata table in the next issue. For other errors I merely paired the mistakes and corrections, but when it came to Emperor Ōjin I felt compelled to include a special phrase: “I *reverently* make this correction” (*Tsutsushinde teisei suru*). A modern Japanese student, finding such a portentous phrase in an academic article, would doubtless roar with laughter; thirty years ago it was far from being a laughing matter.

² Japanese are likely to make this mistake for two reasons. (1) The Emperor Ōjin 応神 was succeeded by the Emperor Nintoku 仁徳. The character 仁 is pronounced in Japanese both as *jīn* and as *nīn*. (2) One of the greatest civil wars in Japan is called *Onin no Ran*, which began in the first year of Onin 応仁 (1467 A.D.) and brought about vast destruction in Kyoto.

【出典】

Masao Maruyama, *Studies in Intellectual History of Tokugawa Japan*, pp. xvi-xvii, © University of Tokyo Press, 1974. Reproduced with permission of Princeton University Press.

翻訳: Mikiso Hane, 1922–2003 (Knox College Advancement Office)

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	受験番号	氏名
人文学専攻 (日本史学専修)	後期課程	外国語 (英語)		

次の英文を和訳せよ。

The Tokugawa shogunate, which ruled over Japan for more than two and a half centuries, came into being after the battle of Sekigahara of 1600. There, Ieyasu, the first in the Tokugawa line, destroyed opposition forces to become the unassailable ruler of all Japan. The emperor, a figure of more symbolic than actual authority, conferred upon him the ancient hereditary title of shogun. Ieyasu established a centralized system from what had been, only a few decades earlier, a fractious polity fragmented into several hundred warring domains. From his new capital of Edo, later to become Tokyo, Ieyasu Tokugawa imposed, by brute force, an unprecedented peace. The period from 1600 to 1868 was marked by a total absence of warfare, so much so that the samurai warriors, whose *raison d'être* had been to fight for their *daimyo* lords, sank into a state of indulgent idleness. As they consolidated power, the Tokugawa shoguns neutralized all possible opposition—from Buddhist priests and peasants to the *daimyo* and the emperor's court at Kyoto.

The Tokugawa brooked no external opposition either. A clamp-down on Christianity, begun in the 1590s, accelerated in the first years of Tokugawa rule. There was to be no competition, particularly from a foreign god. The first missionaries had arrived with Portuguese traders in the 1540s. By 1600, some 300,000 Japanese had been converted to the Catholic faith. The Portuguese habit of taking slaves, as well as souls, had not endeared them to Japanese rulers even before the Tokugawa family had established absolute control. The subsequent clampdown on Christianity blended with a policy of severely restricting relations with all Europeans, Christian or otherwise. From 1633 to 1639, Iemitsu, the grandson of Ieyasu, issued a series of edicts designed to control, if not entirely sever, Japan's relations with the outside world. The teaching of Christianity was banned. Japanese ships were prohibited from sailing west of Korea or south of the Ryukyu islands, an independent kingdom later to be incorporated into Japan as Okinawa. Foreigners were forbidden from travelling inland or distributing books. The British had already given up on Japan, since there were greater riches to be had in India. With the Portuguese expelled, among Europeans only the Dutch, confined to their artificial island, had any sort of contact with the Japanese at all.

These restrictions may strike us as hideously xenophobic today. But it is worth bearing in mind that contact with Europeans in those days rarely ended well. The Dutch, who were polite decorum itself in Japan, had, in 1740, carried out a massacre of some 10,000 ethnic Chinese in Batavia, present-day Jakarta. Japan's prickly relations with the outside world have by no means always served it well, but virtually alone among Asian nations, the country escaped the indignity of outright colonization.

【出典】

David Pilling, *Bending Adversity: Japan and the Art of Survival*, pp.59-60,
© 2014 by David Pilling.

Reproduced by permission of Penguin Books Ltd.